

つくろう！ 地雷の無い大地

JMAS（ジェーマス）は、地雷・不発弾処理等のプロジェクトを実施している団体である。専門的技術を有する自衛隊出身者が中心となって、二〇〇二年五月に設立され、現在世界各地で活動している。世界中の紛争跡地には、今なお膨大な数の地雷・不発弾が残されたままになっており、そこに住む人々は、常に厳しい環境の中での生活を強いられているのである。JMASは、そのような地域と人々の自発的發展につくすための支援活動を続けている団体なのである。

呉に住む^{おもしろい}大本俊志さんは、そのような世界の現実を知ること、とても他人事とは思えなくて、心を痛めていた。地雷や不発弾の処理に困っている国のニュースが流れるたびに、いつもいたたまれない気持ちになるのだった。そして、何とかしたいという強い思いにかられ、ついにJMASの扉をたたくこととなった。

人力による地雷処理の三か月の厳しい訓練を終え、大本さんは、カンボジアへ向かうことになった。日本から飛行機で約八時間かかるカンボジアは、日本の国土の約半分の面積であり、そこに約千三百万人の人々が暮らしている。日本の三倍もある平地には、なんと約六百万個の地雷が眠っているとされている。主な産業は農業で、米やトウモロコシ等を生産しているが、多くの地雷が埋まっけていて、畑を耕すのも困難であった。

現地入りした大本さんが最初に見たのは、たくましいカンボジアの子どもの姿だった。水道の施設が整っていない村では、井戸が共同の貯水池であり、朝起きて、家の水ガメいっぱい水をくむのが子どもの仕事になっていた。農業用水と飲料水の区別もない少し濁った水であるが、黙って当たり前のように働く子どもの瞳は、不思議と明るく澄んでいた。学校にも行けなくて、毎日牛集めの仕事をしながら家族の役に立っている子どもにも出会った。そんな子どもたちからは家族の労働力となり支えている強さを感じられた。（きつと、カンボジアの貧しい環境が、こんなにもたくましく生きる子ども



もをつくっているんだ。)

大本さんは、命を懸けたこのプロジェクトの不安な気持ちだが、何とかしなければという使命感に変わっていくのを感じた。

しかし、命がけの地雷撤去作業は、大本さんの想像をはるかに超える過こくなものであった。小さい地雷は、探知機も反応が鈍い。わずか五百グラムの力で爆発する。一瞬の油断も許されない。

(一歩、一歩。そおっと、そおっと。)

息を飲むような作業が続く。精巧にできている地雷は、ひとたび踏んでしまえば、足が飛んでしまう。それこそ、ひとたまりもない。二人一組でやるこの地道な地雷撤去作業が、気温四十九度にもなる大地の上で、毎日続けられている。



(どうして、この辺境の地まで来てわしは、このような過こくな作業をしているのだろうか。)

大本さんの頭の中に家族の姿がよぎる。自分の命を心配し出発に反対だった妻。お父さんのやりたいことをやったらとそっと背中を押してくれた我が子。

(やっぱり無謀な決断だったのだろうか。)

大本さんは、自問自答してみた。

(いや、一個一個が大切だ。『つくろう！地雷の無い大地』その思いでやっているのじゃないのか。誰かがやらなければ。今、自分がやらなければ……。)カンボジアの底抜けに明るい子ども達の顔が浮かんで消えている。



三か月間にわたるカンボジアでの地雷・不発弾の処理を何とか終えた大本さん。まだ、ほんの少しの数の地雷除去ではあったが、やりがいのある仕事だと感じた。そして、何よりも現地に住む人々が喜んでくれることが何よりの励みとなった。これから日本へ一時帰国をする大本さんは、この貴重な体験を一人でも多くの人々に伝えたい気持ちになっていった。一人の力は、とても小さいかもしれない。でも、それが集まれば大きな力になっていく。日本に帰ったら、心配をかけた家族にありのままを話し、また、この仕事にチャレンジしたい気持ちを伝えたい。